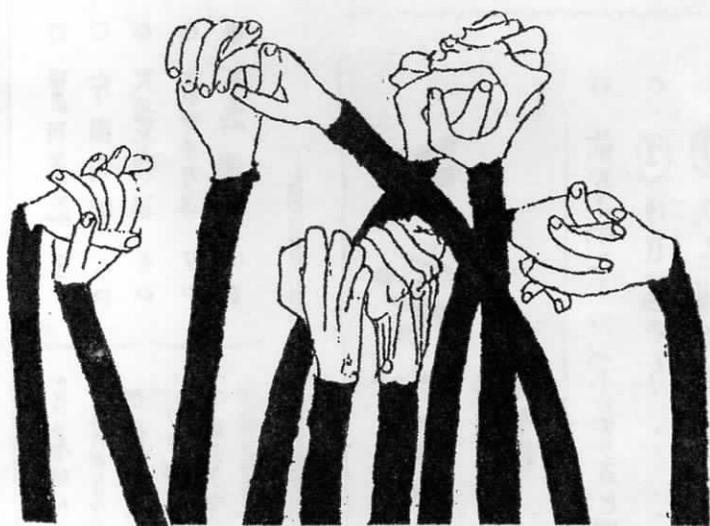


# ハラハラ大集会

日本人であることに責任をとろうとした人たち

東アジア反日武装戦線に対する死刑を許せるか



## ▶ 獄中者メッセージ・シンポジウム資料

日 時	9月5日(日)	会 場	大阪地下鉄谷町9丁目(上六)
	午後1時~8時		三和会館ホール

### 主催

- 東アジア反日武装戦線に連帯し●あるいは異同を超えて支持支援し●または死刑重刑攻撃に反対し●その他、野次馬でもなんでもともかく関心をよせる者みんなの大連合 Tel 06-647-4089

# ハラハラ弁当交流会

- ◎ 由会後、会場にゴザをひろげて交流懇談会を約一時間ひらきます。
- ◎ 参加実費 - ハラハラ弁当? と / 本(ビール、酒、又はジュース)付きて 700円
- ◎ 当日午後3時まで(に要付へ(入場時おわたした申込票に700円をそえて)せひお申込み。

『東アジア反日武装戦線』

# メッセージ集

- 黒川芳正 3P
- 片岡利明 4P
- 大道手将司 6P
- 荒井まり子 7P
- 大森 勝久 10P

・当著者順に配列した。  
 ・荒井まり子さんのみ二つある  
 が後者は紙上掲載のみ。  
 ・メッセージのあとにつけた山文は  
 手紙より実行委が落意的に  
 抄出したもので、文責は向井存

# シンポジウム 資料

- 前おきのにーシンポのやり方と四つの立場
- ① の立場から 11P
- ② の立場から 13P
- ③ の立場から 14P
- ④ の立場から 16P
- ④ の立場から 19P

# 不在紙上参加を!

- ◎ 当日参加できない方は、本資料集をどらんの上、シンポへの発言、または1分内アピールとして、11がキによるひとことをお送り下さい。(正は実物大用紙)
- ◎ X切りは9月2日、送り先 大阪市阿倍野区 旭町2-12-2、向井存
- ◎ 会場壁面に展示します。 ハラハラ実行委

シンポジウムの企画設定の至趣については、9/18のハラハラ大集会ニュースに時目を追った報告があるのて、そのので、それをも参照下さい。残部僅少。

# 東向黒の巻

「しるべなき道を遠くまで」

目に見ざる道を歩まず

あえて目に見えない道を

ぼくらは群れついでに歩みゆく

しるべなき道を遠くまで

終わりになき道をどこまでも

ぼくらが背に負う

歴史の負債はあまりにも重い

歩むぼくらの両足は

スアリ地に深くのめり込み

ぼくらの歩みはここにある

だがぼくらは引き返せない

荷を投げ打つこともできはしない

それはぼくら自身の影だから

明日に向かって歩むことなく

暮り去ることはできぬから

ぼくらはその影を引きずって歩みゆく

しるべなき道を歩みゆく

ぼくらが歩んできた道しるべには

ひっそりと墓標が立っている

戦いなかばに斃れたぼくらの仲間が

夜空に輝く星をみつめて

目覚めつづけている墓標が

だがぼくらの歩む前にしるべなく

ぼくらを導く地図もない

ぼくらが頼りにするのはただ

ぼくらのからだに潜む予知能力と

ぼくらの足裏の方向感覚

だがぼくらは道を踏みはずすまい

ぼくらはひたすら前へ前へと歩みゆく

地図に書かれていない

だが心にははっきりと見える

輝く道を

しるべなき道を遠くまで

終わりになき道をどこまでも

(朗読時・印は省略する予定です。)

このように、日本の政治は、このように、

日本の政治は、このように、

# ミスター・バーク (Mr. Barker) の勝利

一 東海川子正人からの手紙 帝約的抄出

二日でした。翌日朝の新聞を手にするまでの不安や期待、戦犯破壊される「の月出しを発見したとき、その心臓の鼓動を、ほ

くは今日まで世界のいづれに於て出たことだかきかた。

だが、ぼくがなげきやうとして来たのは、一九七四年八月三十日金曜日、三菱重工の空庫に爆弾を仕掛けた、その場を占める車の中で聞いたラジオの臨時ニュースです。しかし、あの爆弾は、三菱に物的被害を与えた以上、たくさん一般市民を傷つけ殺してしまつたのです。

あれからすでに八年の歳月が流れていきます。ぼくは、あの日から「武装斗争のみがわれわれを解放しよう」という信念を放棄し、やがて、武装革命路線そのものを否定するに至りました。

だがぼくは、ぼくたちの闘いを脱じたのでは一度もあきらめず、ぼくたちの闘いは、直ぐに革命軍に道を開く等々に押して来たところから見て、ぼくたちのこの闘争には、ついにぼくたちの心がなつたこと、生命をかけてついでに時代の切替へついでに闘争へとついでに、たまたまついでにやがては、ついに

十年また、ぼくたちが生命をかけて打倒しようとしたこの闘争の歴史が、復活しようとする。

ぼくたちの闘争の歴史的な正しさの歴史です。しかし、その正しさがこんな形では、しか証明されなかつたのは、日本人にとって、東アジアの人民にとって、きつめて不幸な出来事

ついでにこの合法闘争が圧殺される時代がやってくると、きつたときに踏まなければならないのは、底辺の人々であり、社会的弱者です。武力闘争でまっすぐに犠牲になるのもこの人々です。

ぼくたちは、非暴力の闘いが十分な力をもつこの短かい時代を、決して無駄に過してはならないのです。

東アジア反日武装戦線の闘いの教訓を徹底した非暴力直接行動の闘いの中に生かすことが、東アジア反日武装戦線の志を真に生かす道だとぼくは信じます。

この集会に参加されたみなさんひとりひとりが、それぞれの生活の場で、新たな決意と希望をもって帝國主義との闘いを始めて下さい。

それがぼくたちの最大の願いです。ぼくたちも、あらゆる弾圧に屈することなく、誇りをもって最後まで闘いぬくことをみなさんに誓います。



◆-----「ぼくたちの闘争」を「非暴力」に「変換」する「東アジア」の歴史

「ぼくたちの闘争」を「非暴力」に「変換」する「東アジア」の歴史

「ぼくたちの闘争」を「非暴力」に「変換」する「東アジア」の歴史

「ぼくたちの闘争」を「非暴力」に「変換」する「東アジア」の歴史



私たちは、好むと好まざるにかかわらず、被植民地人民の犠牲の上に生きてゐる日帝本国人です。そして、たとへば、買春観光という、性侵略を許していることで、侵略の荷担者でもあります。

私たちのこうしたあり様は、日帝を打倒し尽すことでしか変革できません。

日帝は、ただちに、具体的に撃たれなくてはなりません。

教科書の国家統制を行ない、かつての侵略と植民地支配を美化し、天皇制の新たな復活を画策し、軍事大団への道をひた走り、レバノンを侵略し、パレスチナ人民を虐殺するシオニスト・イスラエルを一貫して支持してきた日帝を撃つことに何のためらいが必要でしょうか？

私たちのためらいは、日帝政府・企業の侵略の一層の拡大と公害輸出、森林・漁業資源の略奪、現地軍事政権へのテコ入れと人民弾圧に直結します。

私たちは一切のためらいを捨て、速やかに日帝中枢を撃つ戦いを再開しなくてはなりません。

かつての私たちの三菱重工爆破の誤りと失敗を克服する反日武装闘争の復権を勝ちとっていきましょう。

### ▼ 大道寺将軍さんからの手紙、抄

★…内容について、特に行動提起に關しては、全く一般的、あるいは抽象的なものしか獄中からはできません。それを書けば、向

違ひなくぬりつぶされてしまふでしょう。(これまで常にどういふことをやられてきているのです。だから、獄中からの一般的で抽象的な問題提起、行動提起に対しては、獄外の皆さんに想像力をゆかせてもらいたいと思つています。……)



★足を踏みつけられている者の痛みは踏みつけている奴にはわからない。

足を踏まれている者はその間中、一時もその痛みを忘れることはできないが、踏んでいる奴は踏んでいることにさへ気がつかないでいられる。

自分のことは自分が一番よく知つてゐるって本当かな？

自分の姿は鏡に映さなくちや見えぬ。

自分の後姿は自分では見ることができない。

自分の外に出てみて始めて見えてくる自分がある。

日本の教科書書き換えに對して最も激しく斗つてゐるのが日本人民じゃなくて朝鮮や中国台湾人民であるのは何故？

何故日本人民は怒らない。怒れない？

★天皇を殺そうとしたが故に天皇を許し続けている日本国民



「斗えぬえってごどをはねえど思うんだよな。」

例えは目的地に着くまでに百の峠は越えぬげぬえとすっぺ。  
そんな時に・また一つの峠も越えぬえうちに・しんどそうだなや  
あの峠の向こうは何あつかわかんね・クマ出て来たならなじよす  
っぺ、まむす出て来たならなじよすっぺ、崖くすれになつたらな  
じよすっぺ、途中でへたばつたらなじよすっぺ、ああでもね・  
こつでもねど考えで・結局一歩も進まぬげぬえ・そいつは何ほ  
付解しても、ひとつの峠も越えらいぬがったつづつごどに変わ  
りぬべ。

そんなでは何年たつたつて元のまんまだよな。

▲オラの考えは・そつてぬのっしや・まんま・一つの峠は越え  
てみる。

そすたらはずめで、次に越えぬはんねえ峠が見えでくるし  
その次の峠を越えるためには何をすたらええのがつづつごども  
見えてくんでぬがど思うわけよ。

実際に歩きはすめで見つと・何が足りぬがったのが・こんな次  
には・どついつごどに氣イつけばいいが、わがってくんでぬ  
えのが・そうやって・一生けん命自分の足を歩いてよ、精一杯  
力をつづして三つめの峠は越えだびつ重裏には変わりぬえべよ。  
ても、それは三つの峠を越えだびつ重裏には変わりぬえべよ。

●「しだつて三つめの峠で力つきで倒れたら・目的地に着か  
ぬんだがら・苦勞して三つめの峠まで歩いて来たごどが、無駄  
になんでぬえのがや。」

▲「三つめの峠で力つきで倒れたら・その後引き継いで、四  
つめの峠を挑戦してける人が出てくればそれでいいんでぬの？  
最初っから一人で全部やろうど思つたつて・それは無理つづつ  
もんだべよ。」

●「しだつて四つめの峠を挑戦してけるあどつきが本當にい  
つかどうかわかんぬべ。」

▲「そりや・そうだ。」  
●「それに、ちゃんと先は見込して準備すぬげ・オメオメと  
無駄死すっかもしやあねえべ・そんなのは無業でぬえが。」

▲「むろん・考えられる限りの先は見込して、準備すんのは  
あだりめだべよ。んでも、何ぼ先は見る、準備するつたつた  
て、準備にヤキリはねえんだよ。一つ一つ考えを力をたぐぬえ  
ながら、歩いていぐごどが大切なんでぬえべが？歩き出さぬえ  
理由は、何ぼでも限りぬぐあつたよ。」

特に歩き出さぬえ限り死んでしまつたわけでもぬえ、一応その  
場所が止まつても、食うに困るわけでもぬえつづつ場合はよ  
あれこれと理屈こねで、結局は動き出さぬ方が楽がもしやぬべ。  
そして、峠は越えで行つた人が力つきで倒れた時に「それ見  
ろ。言わんごちやねえ」と・その人の不十分さは非難すつこ  
どは簡単なごどだべや。」

●「おめはひとつも峠を越えぬえうちにバクういだんでぬが。  
▲「んだよ。んだがらサ、んだがらと言つてオラは「オラは  
まだひとつも峠を越してはいぬえよ」と言つて出発点を戻り



